

繪本三國妖婦傳 上編 三

へ 13  
2892  
3



門 へ 13  
 蔵 2892  
 巻 3

繪本三國妖婦傳卷之三

目録

太公望雲中子に遇て照魔鏡と得る並雷震が傳

太公望終南山に於りむく圖

太公望雲中子が門小イむ圖

太公望雲中子が宝鏡を傳へ雷震に見る圖

九  
 三  
 日  
 晴

周の武王殷を伐て亡せし 並太公望妖狐を斬る

周の武王殷を伐るの圖

紂王鹿臺に焼死するの圖

妲己を斬る刑の圖

妖狐を埋るの圖

三國妖婦傳 卷之三

三國妖婦傳 卷之三

太公望雲中子に遇て照魔鏡を得 雷震が傳

西伯侯堯卜のひらき 大公子西伯の長子姫余城を西伯

の位に嗣し 周の武王を刑罰の討て 妲己とこのの靈の

嬪樂を夜て 妖狐を海宴に明し 長女の宴と号次

を以て 妖狐を以て 國を去て 武王の討て 切を

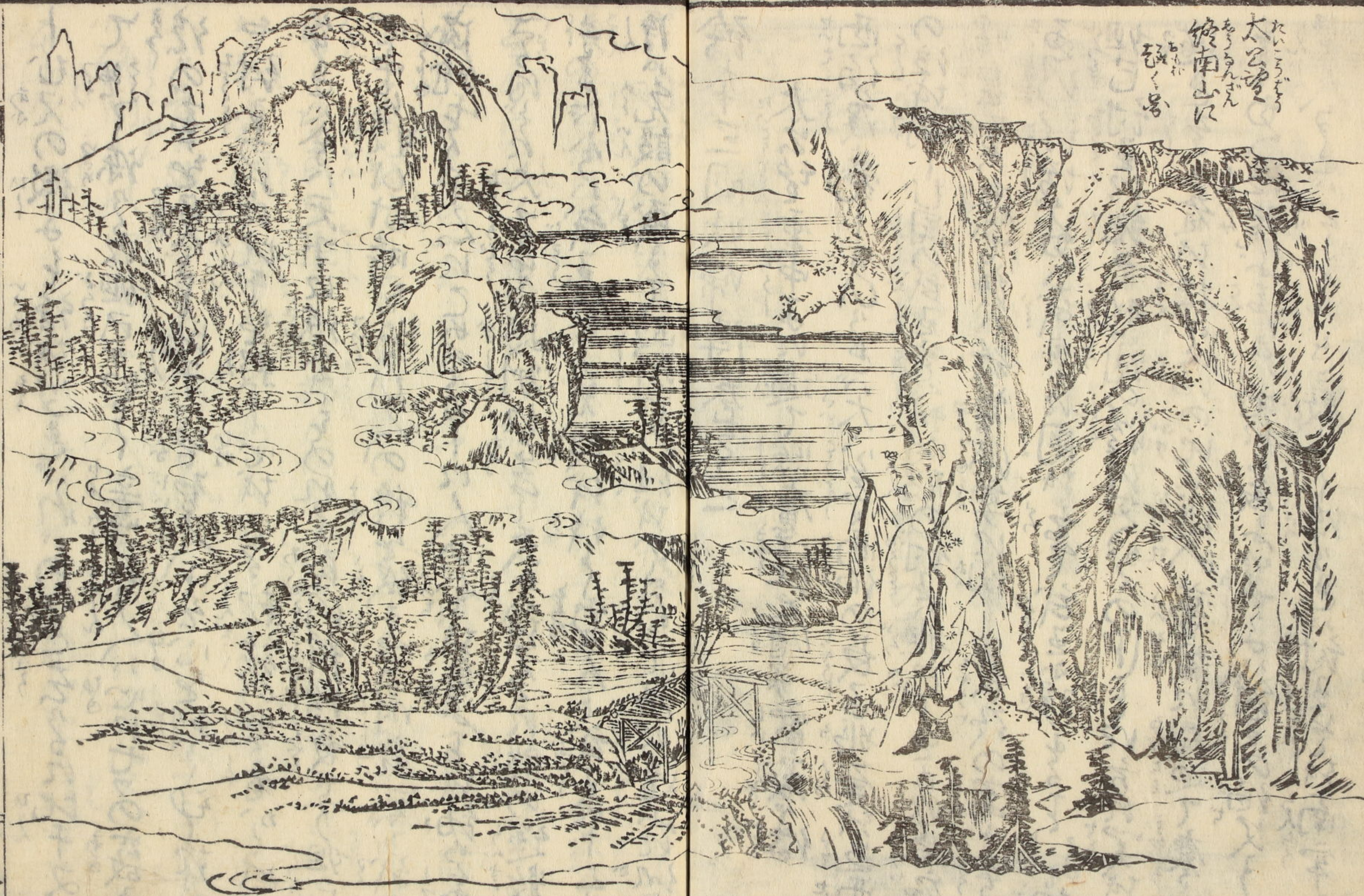
妲己討て 刑罰の討て かくのびと 以て 冥城捕

逐を 走る者 捕て 海の比に 進入 萬壺に 投て 鹿を

さら ぬ 淫 號 不 言 天 地 以 後 子 討 王 の 伯 父 子

賢人 する べき を 妖 狐 殿 一 殊 色 討 王 是 故 南 宮 因

中

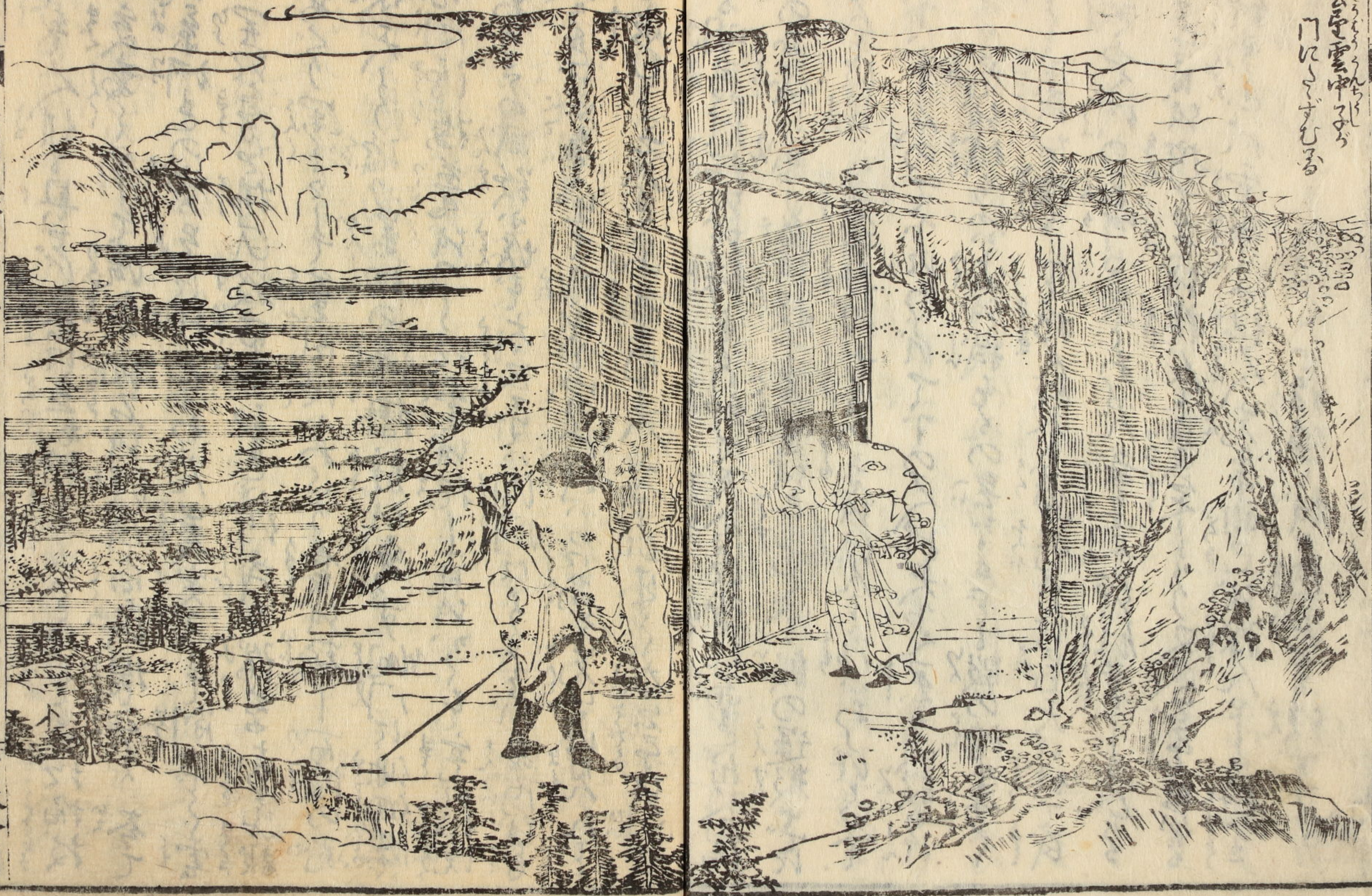


たいこうざう  
大空  
あまのりんまん  
彼南山に  
むかし  
秘く号

一むえの激子を凍成りしむらびのうきを去るに比干又續  
て強く凍るる姫己がいそ音響りて人の心に七ツの穴敷きて  
流の事を免るるに比干の皆智人とも心を判りしゆたかき  
や討まつおに比干を殺し心成らる親族の賢者かくしむ  
るに今い天下に凍るるものれく魚の増長せり姫己は  
心中に候じし時を奪ひ人の機を破るる時を待たり我思ひ  
成物せりといふにこめて甲に人の命を失ふるは成物なる  
さう思ひ大なるに岐州に在り天文城に入らば殷の運教も  
きよまが今い武王城を免殷城をくせさんと武王に十とる  
所ハ元殷の氏を岐州に入はせいと乃に違ふに似れ  
ども明君れ招に城辞せり却て天命に背に當るる由西伯  
侯の死に感し一命を投じ忠を盡し今殷の運教も  
盡んとは候又君城を捨て古王のう城に入らばあはれと  
天下のき人のて下にあがて下の人れ天下を王の又殷が  
とて是れ城のあの上城をのきをもども殷の徳もすく  
きく生氏を踏もておんぬ今候て七とるは天にけて氏  
を救ふ之何のよ可らるるあん武王を是れ城に寄るる  
おぞ名目城探て乞城搦んと武王定しり又大なる思ひ  
は流南にれ雲中子仁人先年姫己城除んとし討ま  
そを城に下るる人れ人を殺して我が内をを後すべしと

大正守雲中子  
門にさすむる

三國女作神之二



三國大正守

四

書本合川

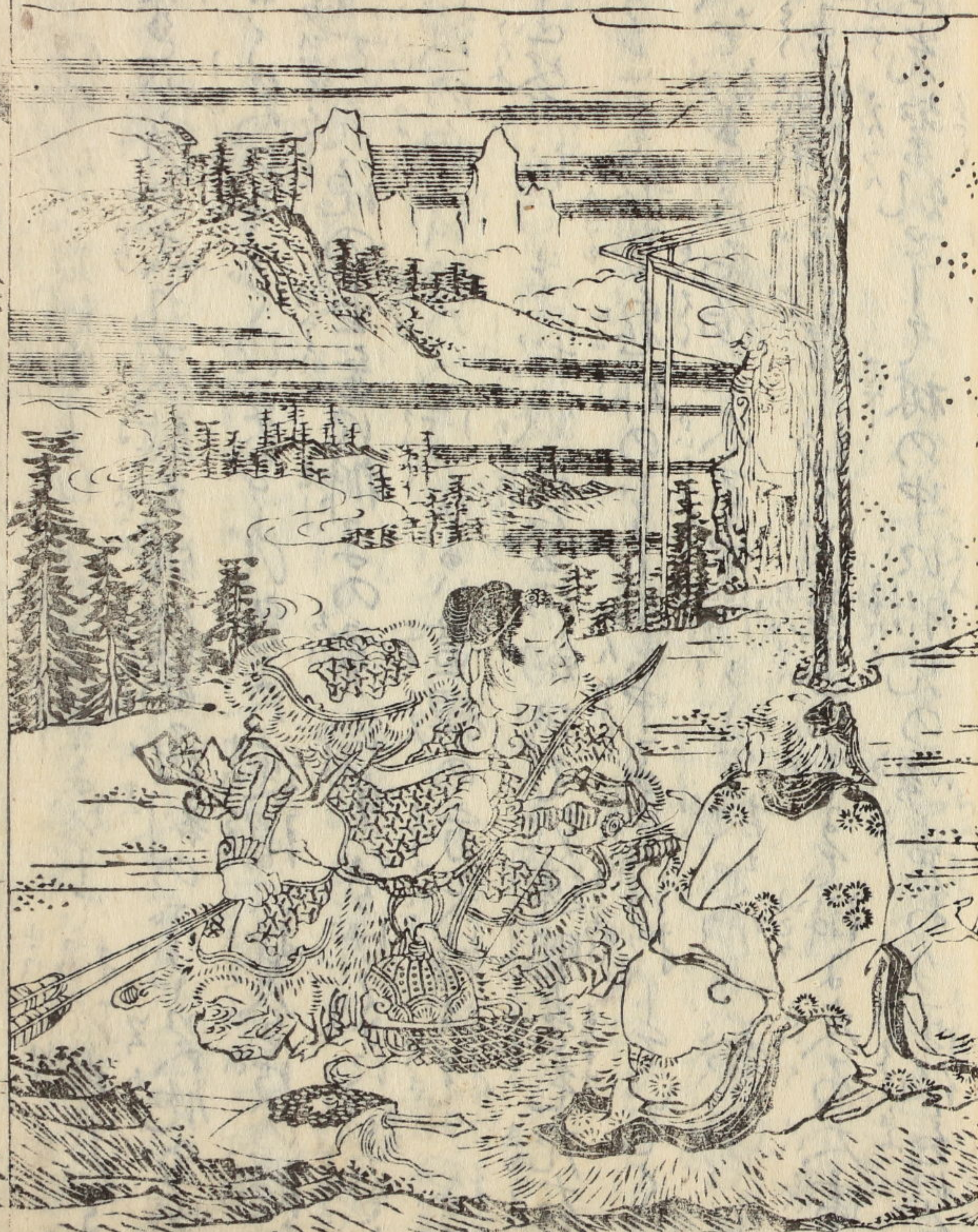
叶き人侍も具せぬ意にさむ流泉細石流の白鹿樹上より空を  
 城交ぬくこゝて流泉細石流の白鹿樹上より空を  
 風系河色の地を是に掃むるわん養尖うて削ぐと雲  
 を玉に玉を拂ひ散る百歩をふり竹茂り瑞草奇花散  
 をあがり深きこゝて養風池かわらぬ養草散一白鹿の死  
 衆天より降り第何の層巒競ひ秀す洞門に仙洞  
 花岡清樓臺城つらね雲霞起一日城をくも雲に仙境  
 のありさぬ感歎か城を大なる洞門にうりまゝ案内は  
 流泉細石流の白鹿樹上より空を  
 をあじと云入も小童内又さびまゝをくも雲霞起一日

階にむすば雲中子論くと歩て出逐ふそ容貌俗哉をて  
 かに道服城忌し身に如き城携へ袂をきて座に待す  
 瓊香文机の上書者種で堆し座をて雲中子先にく  
 我足下の石地城びとしゆいまゝ芝眉に接せし人今幸に  
 顧所城場ふ酒脱河を是に掃むる大なるをがいとく養老  
 先生は太君城びとしゆいまゝ芝眉に接せし人今幸に  
 形下も家契し活余の湖の畔あはる年八旬に玉樹情  
 子一そ元一とてさう城に殿けて不成湯の池にそんを  
 付玉姐已に溺も元氏罪なく書せらる我と又是を必と  
 逃亡の氏とりつて涓水の端漢に臨む時をゆい西伯

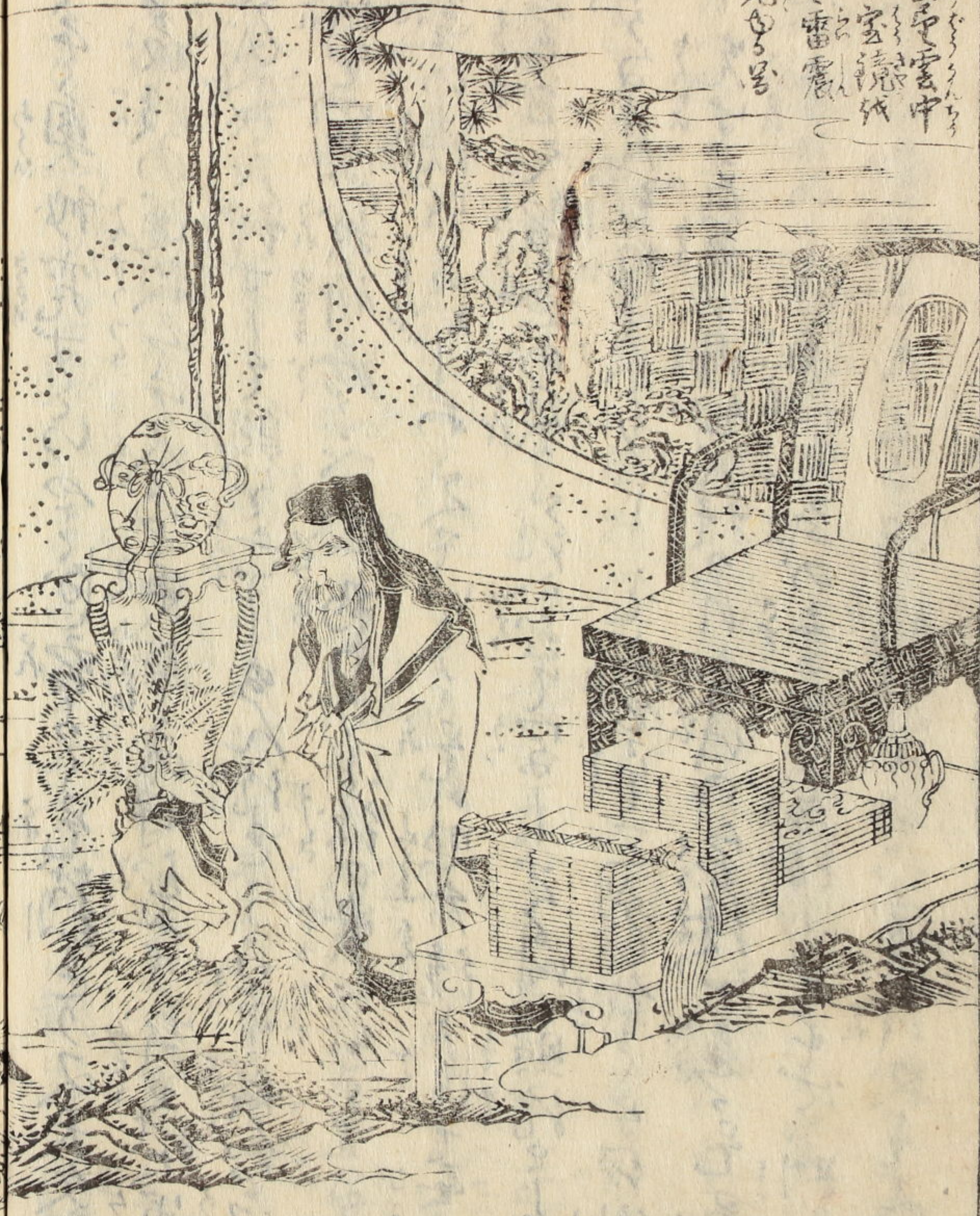
三つが駕城捉て是先城流し岐州小付ひ元右に侍せしむ  
 西伯晏望の武王嗣でに使あり是先小使に大軍師  
 をめて一不日に殷成伐て善民遂炭の善成極人小宮次  
 統まども殷小百萬の勢あつて文湯湯の款にあつてのこ  
 計多不測の妖婦儀にあつて機を察し一密を知り西伯  
 とども囚らば其子比干をこれ彼小若しわらる先生  
 嚮に取物しるし我知つて何ま城流し除人とせしむ  
 傾り流のには成塞り今我け大義成統司にきて先世の  
 事論わが明教成更んと我欲し急にすまらぬえんこと  
 ありせば雲中子助成く是下軍子急法の輪器に成て

其そ奥秘究すといふか吾よく是成はまり又天文を  
 凡の殷の運救して命を更革るの時むむり武王大軍  
 一ふび成す我を亡しめん成まども是下城に成以  
 て我を字我御成るべし一物ありと流の囊にちる成り  
 一巻の流成るる一あえていよく是ハ照平流と成りて二  
 の室成く智成の及る成小成て字しる成照成りて  
 明るるんも秘すべしと成を成二ふび成く是成樹  
 一先成る成先成丹成城成る成計の成成を成る成是成  
 先成成る成海成内成民の成事成と成成りて成成り人  
 とする成雲成中成子成太成公成の成成成りて成成又成人





太子中  
子カ室鏡代  
修ミ雷震  
小見カ  
見カ



豪傑を以て力城物一び下と童子城一と招た即しむ城  
入也バ角の丈九尺眸大眼は西所刺のどく足胞まぐ  
赤く兼城そぐに突るぐ角六連環に背分皮の鏡を  
穿百た泡の虫糸に柳子の舌乃矢城けら子にけ糸糸を  
の鉄の塊城推乃一行も六畫桿の方天戟城提げ梅に  
開山又弁城つ事松紋桐室の劍城え此連腮老毛尤有  
ころもこそ形物鬼神のどく雲中子は城指しといさくけ  
人を知もつる西伯く太乙予愕うそ故を言ふ言は先年  
付王西伯をるるりむる時燕山の下そ俄も大なる雷し  
電光撃乱として林の中に胎児の啼声あり西伯急に人  
城つうこーんせーめのみは古貴の中に雷落て葬まらるる  
棺木破ゆ女の屍城破り嬰子に啼くそあうらんを揚さ  
せてんのみは男子ううてそ生得半神遊半吳骨節奇  
稀なるは子尋たの音にあびと救星の乃城かそちめ  
やうぐ乳母を尋しむるのみはとらも俄はけいこうそ我  
るらずをけりて始て西伯侯に遇なぬ我うのぐ殷の於  
小妖物ある我知て付王城凍ゆども申らまざるうて遍探く  
天下に遊ゆしと妖物城除くべき士を求るにあは河の將軍  
墮て燕山の下に降る城んて尋むし不る色バ互にそ奇  
異を述べていさくけらうしけし子化身長大なる殷の妖物を

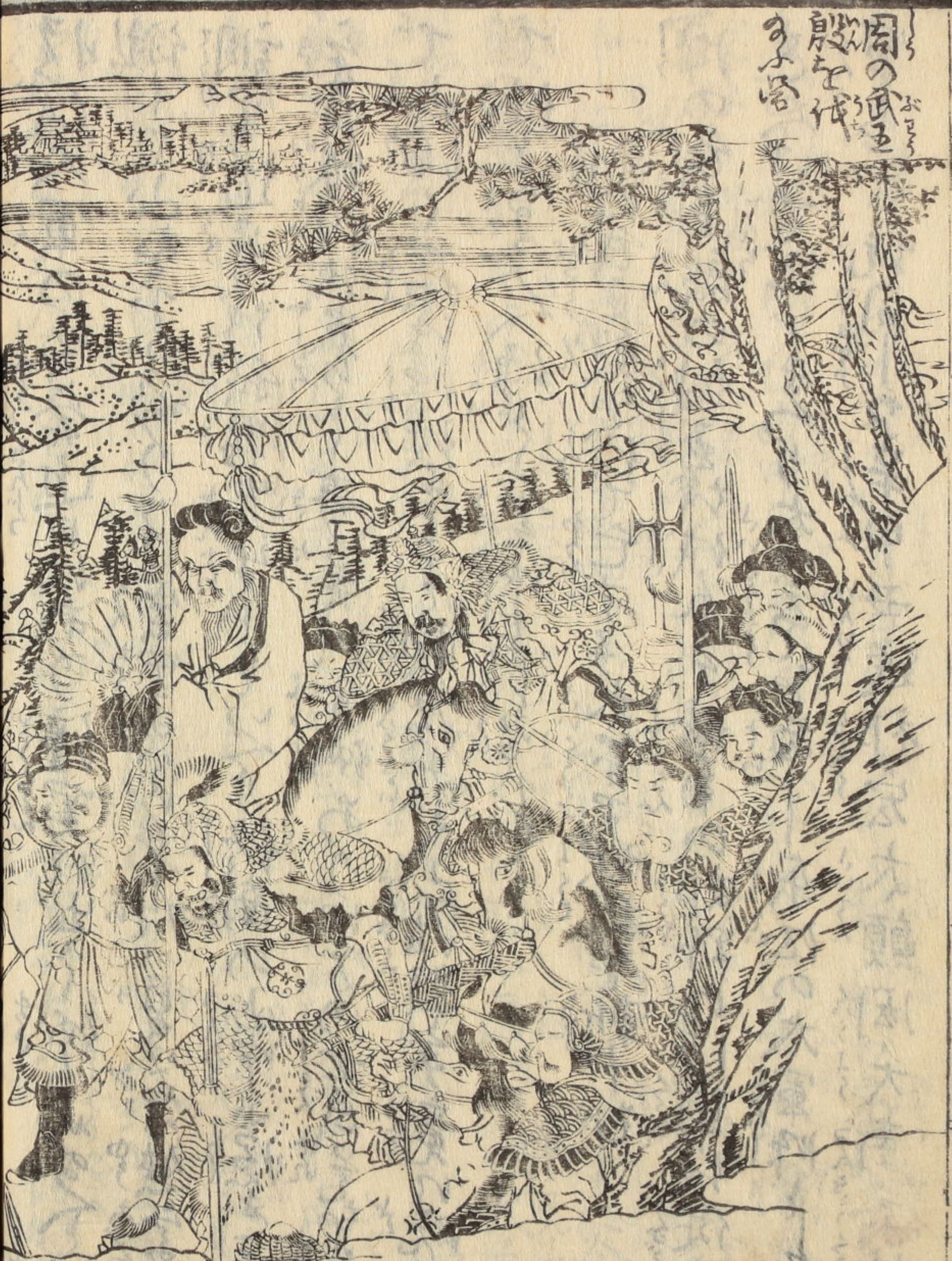
ちよ子産子の民るに首の首ありと我子欲に密に表に  
 一むをせうげびい山中に表の長大に志ぶい云械を懐  
 軍法を教るに一城はて十城はてと云ははて實義を重  
 ドカ他まで難万夫も出へて我欲の時表は依一に今  
 殷の歴教をそて智ら西方に記り本日殷を攻べり此天象  
 小沢をそもてそを及乃に記て軍列に知らしめんとかく  
 志せしと流ふ城びて大云を欲とそ右を言ふに西伯  
 と列をたりし討地日遇とわらるるとも人なる城を志  
 と命ありらるる雷にふくく雲を消る長男の封なる也  
 表に雷震を若ともん下城約せりと流ふ大云を限なく

候び大軍のを条道日にあり瀟湘に出るゆめ今に  
 繼して心を下りゆりり雲中ふいめや此の夏若の徳を  
 調里道号城我思先けともり終南の山中小原をて  
 家城城城城城城城城城城城城城城城城城城城城城  
 で小原く岳城城城城城城城城城城城城城城城城城城  
 て他とる人作る雲中子とる  
 周の武王殷を伐て七す大云を妖狐を斬む  
 周の武王殷の討五城城人そ城南の郊野に歩車城促さ  
 も大にて地をまがり大云ををぬ一東北の大軍隊とそ  
 軍を統司し辛甲尹逸祁宏太顛周天南を括



伯夷叔

周の武王  
殷を伐  
るの宮



城名として一騎當千の大將城をさくはす非但周の  
 召二人をとめて金城を渡りめは初相の西非叙度  
 山城か加へる形て岐州を打ち瀋に至るはくして雲中  
 子に人約せしむる雷震成けりや武王を始て  
 大なるいづつおそくはけを中よりおど武王は西伯  
 の拾ひぬし思ひ親しく我が身とて將に列に加てお憐  
 しみおぞ殷の都小なるも志すて誠切をあしるはる扱  
 流軍いよみなるを武王のほろは洛陽にむるに二人の兄  
 弟の侍に物付するものあり武王はどしどしおの伯  
 夷叙母と云ものん今討王をたんとしるも天之下として

君城執せんとして義にあはれ我のや殷の罪道は  
 伯の徳城をさくはす地はからる地は今君をさくはす  
 攻めんとす一云の徳城をさくはす死を冒しこれ及べり  
 祗ごとくは車城回されしは又西伯侯の威徳は流し  
 ところとたれたる大の怒り我が君は此をさくはす  
 かく曲者搦捨んと闘戦大之を是義人くと扱を  
 するも後周れ天下とほりに殷の武として周の要を合  
 義あわしめんとすそり身首陽山に斬断を推して  
 がある人絶して普天の下用の有はるはるはるの殿  
 を用を生むるはよわびやと云るははるはるの殿て死

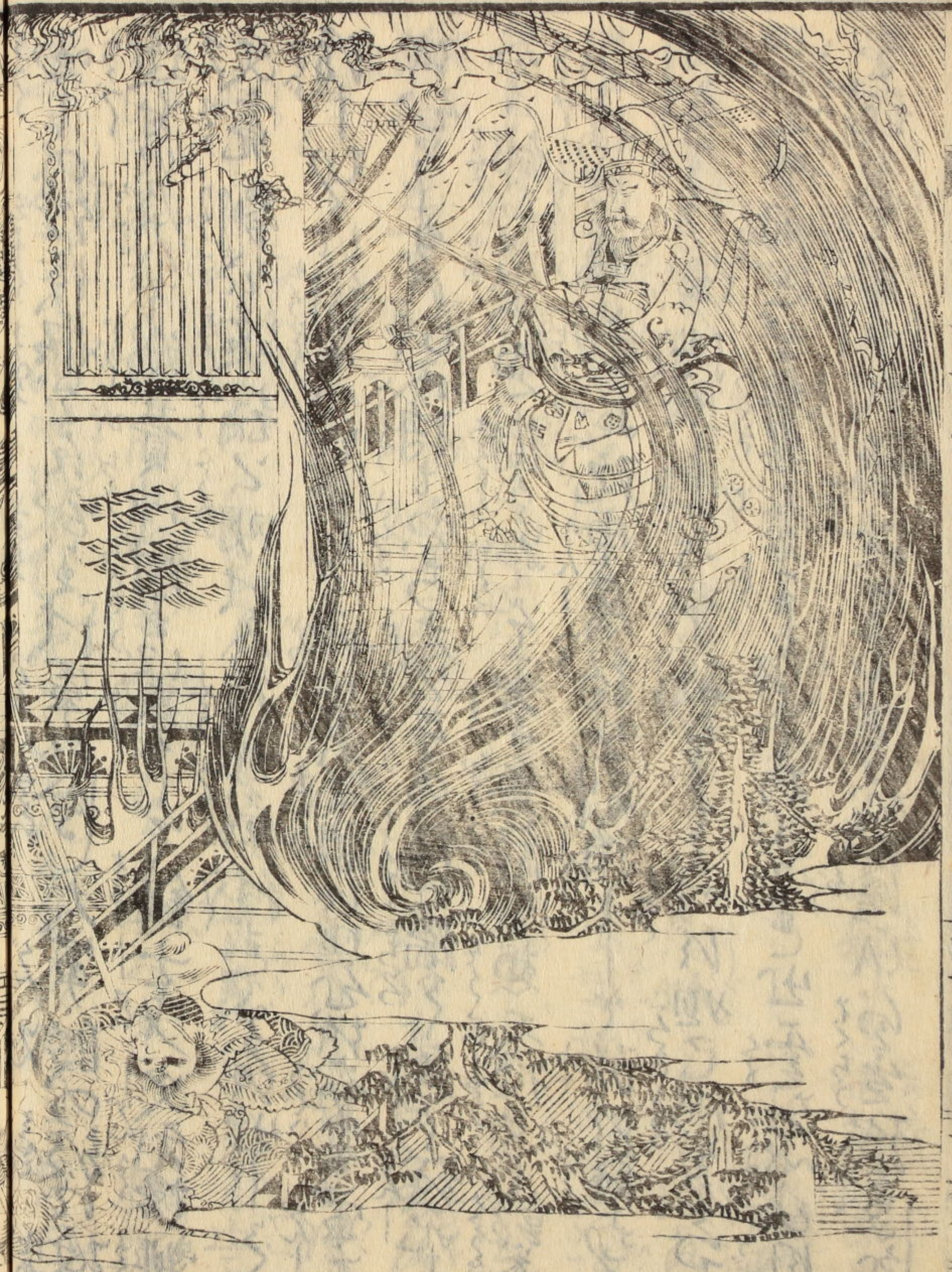
少子今希有也義士とやを殷の都に世た  
 の大軍岐別を棄ててうんは矢は送るに水は破れ  
 漸く軍を斬將を擒一にをの府城を攻め  
 一も孟津河を渡りて洛陽の哨馬橋の蓋を挽  
 ごとく流石眉を燒の思ひを討に奏し軍勢が  
 殆んど思ふ討に已れしとて懼怖を奉じを  
 之れ一に物々半よ入の海に費仲城を下の  
 て奪つたに保つたを奪つてと不た不義を  
 を討つる矢由は月日為は保つたを奪つたを  
 奪つたを奪つたを奪つたを奪つたを奪つたを

少の侯振るる武王に軍に命し大軍殷の都に攻  
 討に及んで費仲討に奏し鍾士史元格姚  
 文亮劉公遠趙公明は將武勇持てて城を  
 攻めしむる討に已れしとて懼怖を奉じを  
 之れ一に物々半よ入の海に費仲城を下の  
 て奪つたに保つたを奪つてと不た不義を  
 を討つる矢由は月日為は保つたを奪つたを  
 奪つたを奪つたを奪つたを奪つたを奪つたを

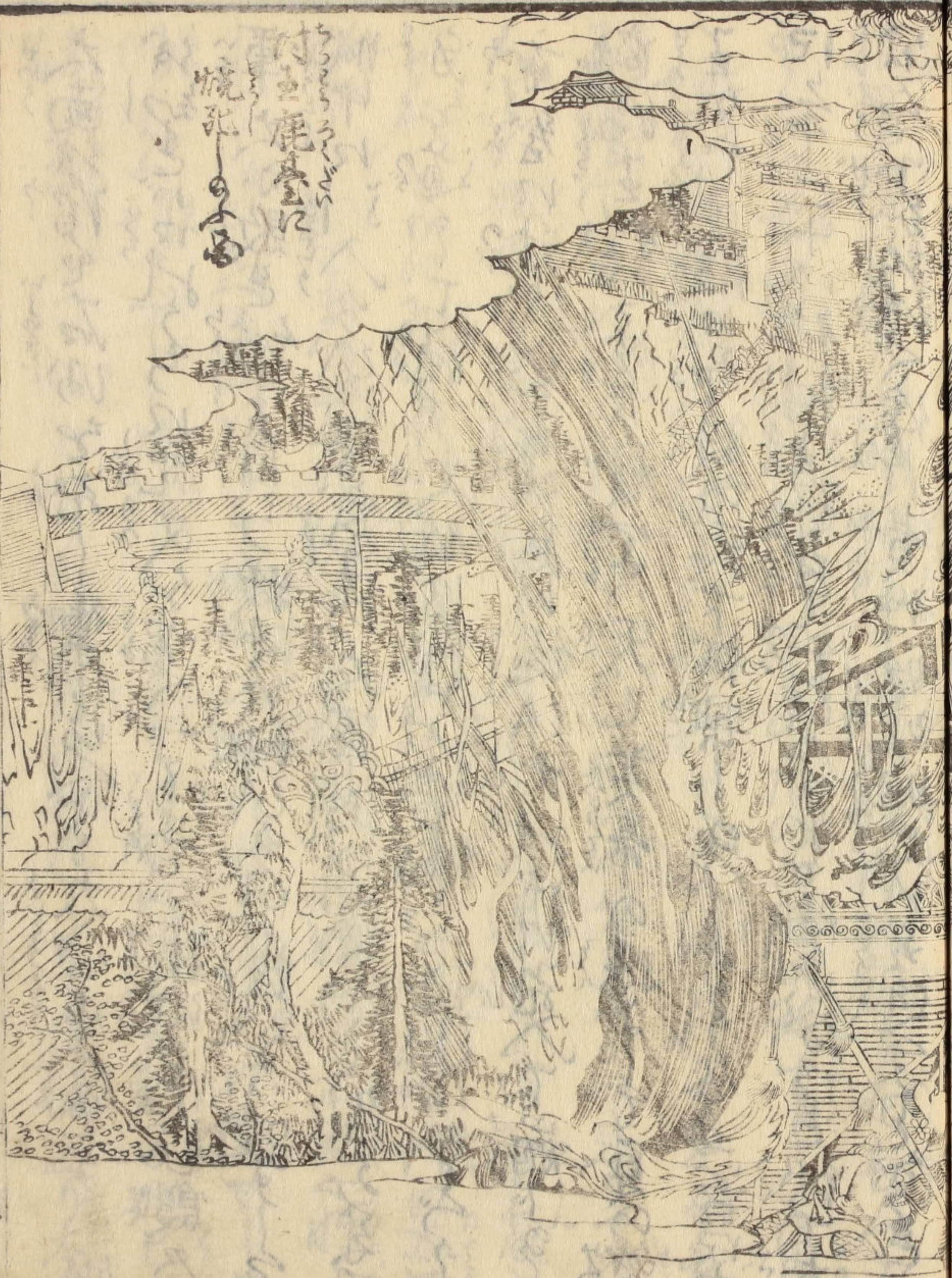
三國志魏志卷之三

三

三



鹿野の  
城



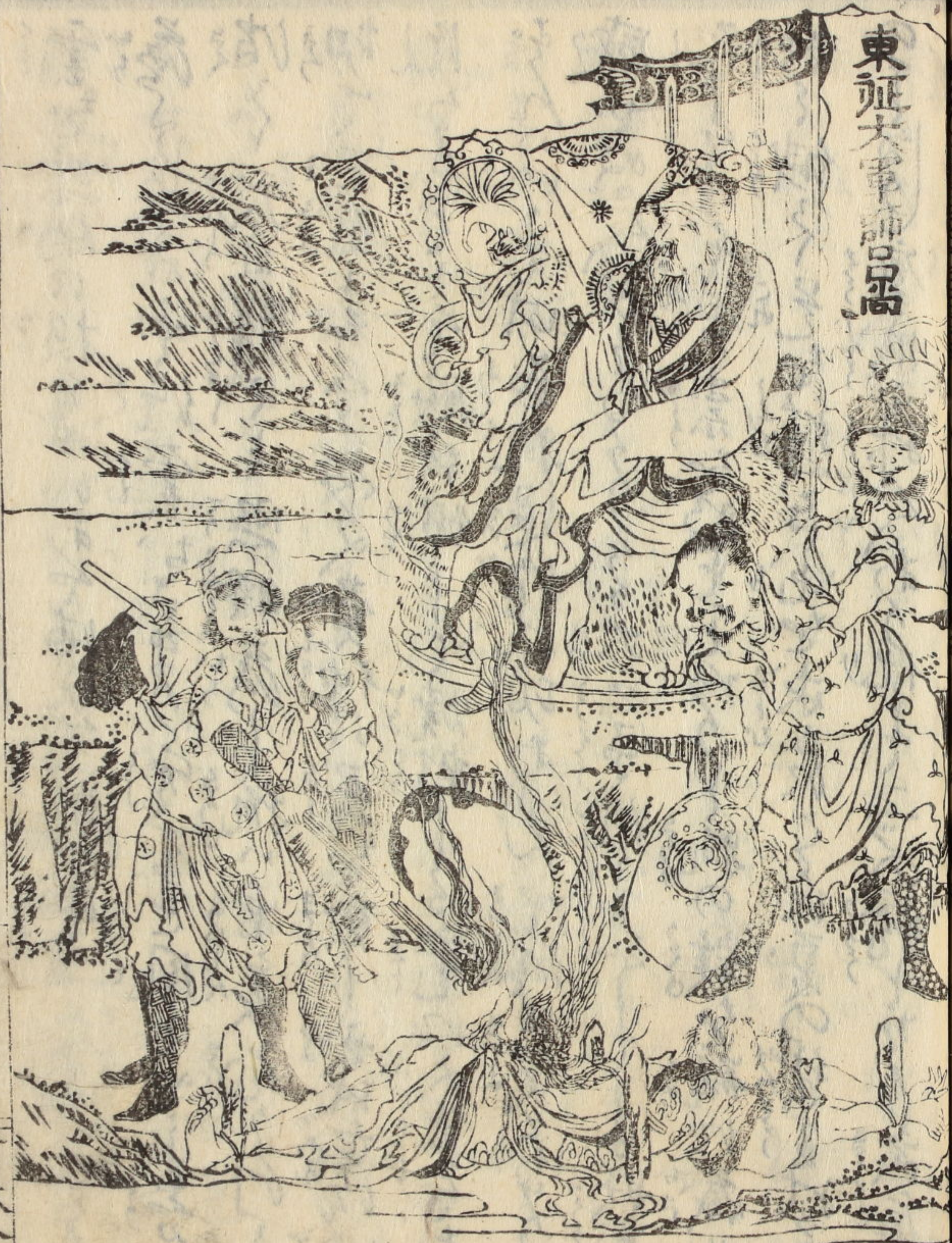
大雨城を石沙を起し御としども大いなるを  
 城知事バにれちの呪文を唱へ一々を消滅せしむ殿乃  
 軍大小敗せ討王自ら牧神に執ひひひの今ハ叶す  
 城中に一入のひらるが武王の大軍潮の湧きくかきつきて  
 舟を道へて終つて大版に火を放て焼くそを陰にまづ  
 麻着の針り宝玉城ぬに纏ひ大城中に飛入て崩す  
 成湯王は子名履字六天乙英帝の孫もて夏の祭  
 王を七十一位の昂殿の天下城興一の今より今二百に十  
 二年二十八代討王にきててびるそを城をまき殺して大  
 公を下城城へ海片貴仲妖妃姐已城を逃すともこと

摘星樓に身入の時姐已一陣の怪風城起し走去んと  
 ぞ城に前の太子殷郊ハ討王の后の腹に誕生しる后  
 ハ姐已が許申にうつて討王に殺れを流されも今武  
 王が隆て軍に従ひ居るが姐已の母の仇をばけりて物  
 んと大姐已令光輝れし冷風人に逼りくるが雷震と  
 とももの前をてしと城拿へ貴仲を生捉て焼く大と  
 至る下をまらまに討王の異事起これ姐已が不為之怪  
 しく鐵をさふあも城外の市に出し強人に見せしめ  
 鳴る刑本と指揮しるふぞ彼本にまく罰子姐已が  
 後に立寄りて劍をさうわげ首を打んとせし振より大カ



らば入て笑一翫を河のほとと人容又海棠の  
揚柳のまゝ風ふりぬむ粧なる紙んそんも  
そ城葉も切んもねさびくね結る風情河を  
んとね結しと色大公を河へくねねと  
又劔をあつらさば姐已ぬきびりつて  
持劔討とあつらさば姐已ぬきびりつて  
劔子を刑一別の劔子を代らむ色は畏て  
ト一姐已が容貌の麗れ小巻てうる  
庭へすむびんに討ふあせとたふあ  
刑すかたせとむらむとむらむとむらむと

戦を受てはあつて大公をいんも  
雲中子と侍一照磨後侍の書より  
姐已の娘にうるとはを以てそ  
ト一破右鏡を姐已が面は  
まで笑一うらうら姐已が  
鏡の面はうらうら姐已が  
つくともむらむと一俄は思雲  
忽ち言葉とやうぬえを  
折さておまねと人とも  
うけ奴奴斬んと號は設部  
うけ奴奴斬んと號は設部



東征大軍師呂尚

費仲伐刑  
 已滅斬  
 費仲伐刑



雲を標的に投付るにあやほざる物に中り大地のくさや  
 落りしるを以て雲ちさまりをなせ風もやまきも  
 消く天日輝くと照曜為し物ハ雷震花のく  
 切て二截とすす相又貴仲ハ石を懸し玉砕亡次城  
 匠の道をもて脈城燃して焼殺する寔に大云をわ  
 ぢんばいそけ魚物退治切あんで所為愛をうり  
 感せぬ人ころらりる大云を殺す下知してころは  
 死してもそ冥宗をわきとつくと物の骸を瓶に藏先  
 能く滅く是を結ぶる地を求るにこれ夏の紫玉れは  
 のとらり鷹城小鉢くあり化そ二ツの銃とかり交庭り

降く紫玉の溜り我ハ鷹城の二君之と紫玉忍て  
 是を殺しそのに龍鼓城吐し夥しそ精糸を横に納  
 知こしは般の世にうら怪物社文中に於るんあは  
 郵野に是を横かぐ埋めそ地を記し後代中を以て  
 あむくても埋めぬのひしそ地乃傍を穿し一丈ありて  
 瓶を合を埋むそ城よく度ひ石をそ上城か先志う中  
 そ處に一堆の碑城連大云をそぶる一石の銘記書  
 しそ城彫刻るそ句かいそく  
 丁未五回 壺織自解 八九之後 幽室竟乱  
 般のそびし日中地針穿み代鷹城草草不台このの

昂後より八十三万又六百八十年丁未年ノ甄乃星  
 帝が城降してここに亡くす凡八百餘年百三十二  
 万六千六百十二年此海城起りて殷の殷城亡く帝  
 位に昇せり五を周とわたり編に都を遷めし相を  
 世有たに法度城封する大公爵の軍功大ひるせば  
 齊の國城賜り度となすはあつて大をさへ綿  
 繡城ぬの油とひ狐馬の車に乗て大城の丘下にか  
 つりては入るに時々にあつて別を去り其の馬氏  
 先世城梅と限りて途中に起り車は前にあつて  
 衆城もあつて始りて書しちりての事と致さるる大

降く築玉の増りて我ハ鷹城の二君と築玉を  
 是を築くは新築城と名し其を精兵を擧げ納  
 知事一に殷の世にゆる怪地文中に於てはあつて  
 郊野に是を擧げり埋めし地を記し後代まで此に  
 あつては城址のあつてし地乃傍を築く一丈の  
 瓶を今も埋りて去りて度ひ石を上げて先志う  
 其處に一堆の碑城建大を築く一石の銘城書  
 して是城彫刻をるる句いこく  
 丁未五回 壺緘自解 八九之後 幽室竟乱  
 殷のそび一日中地計又代虜草草不台この

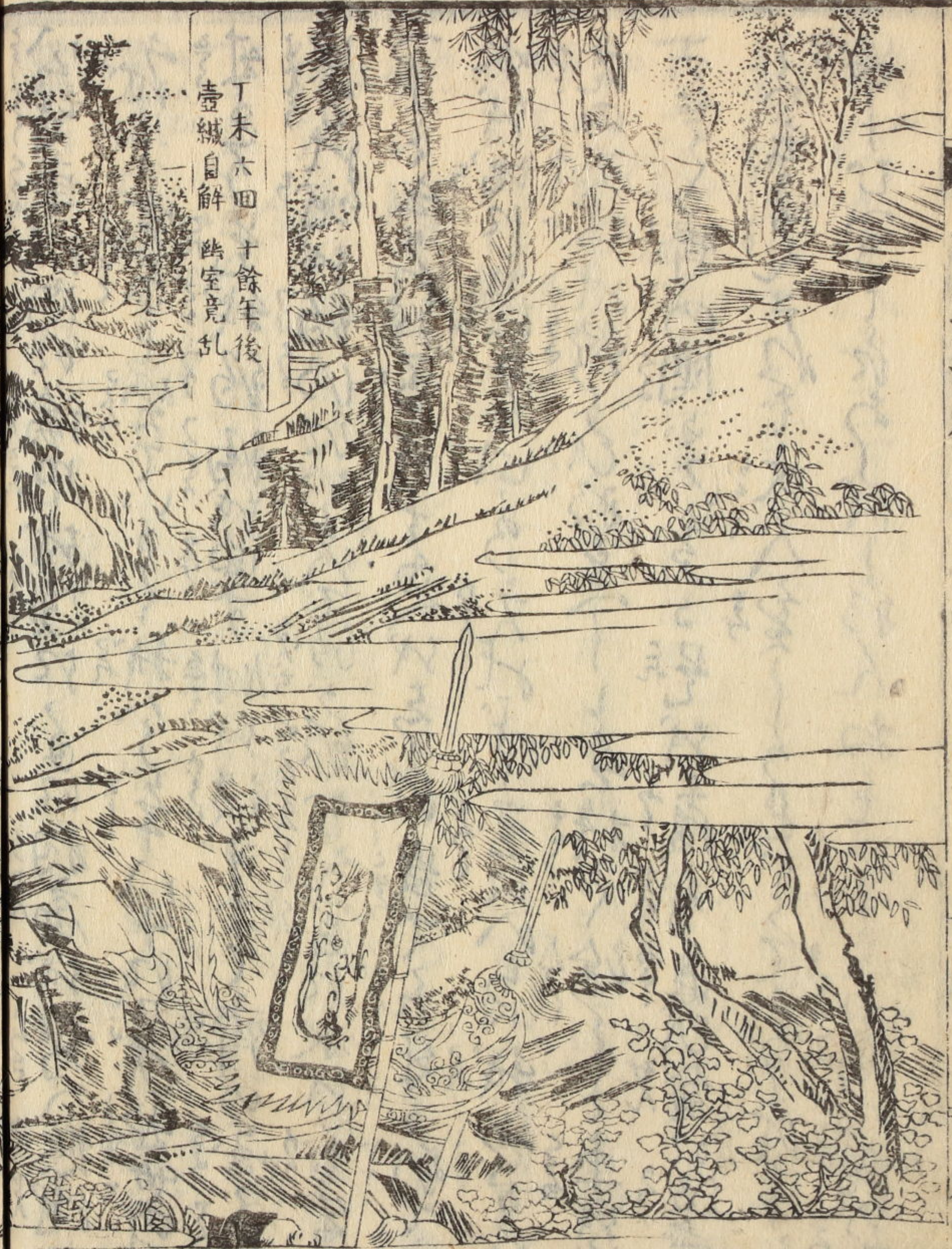
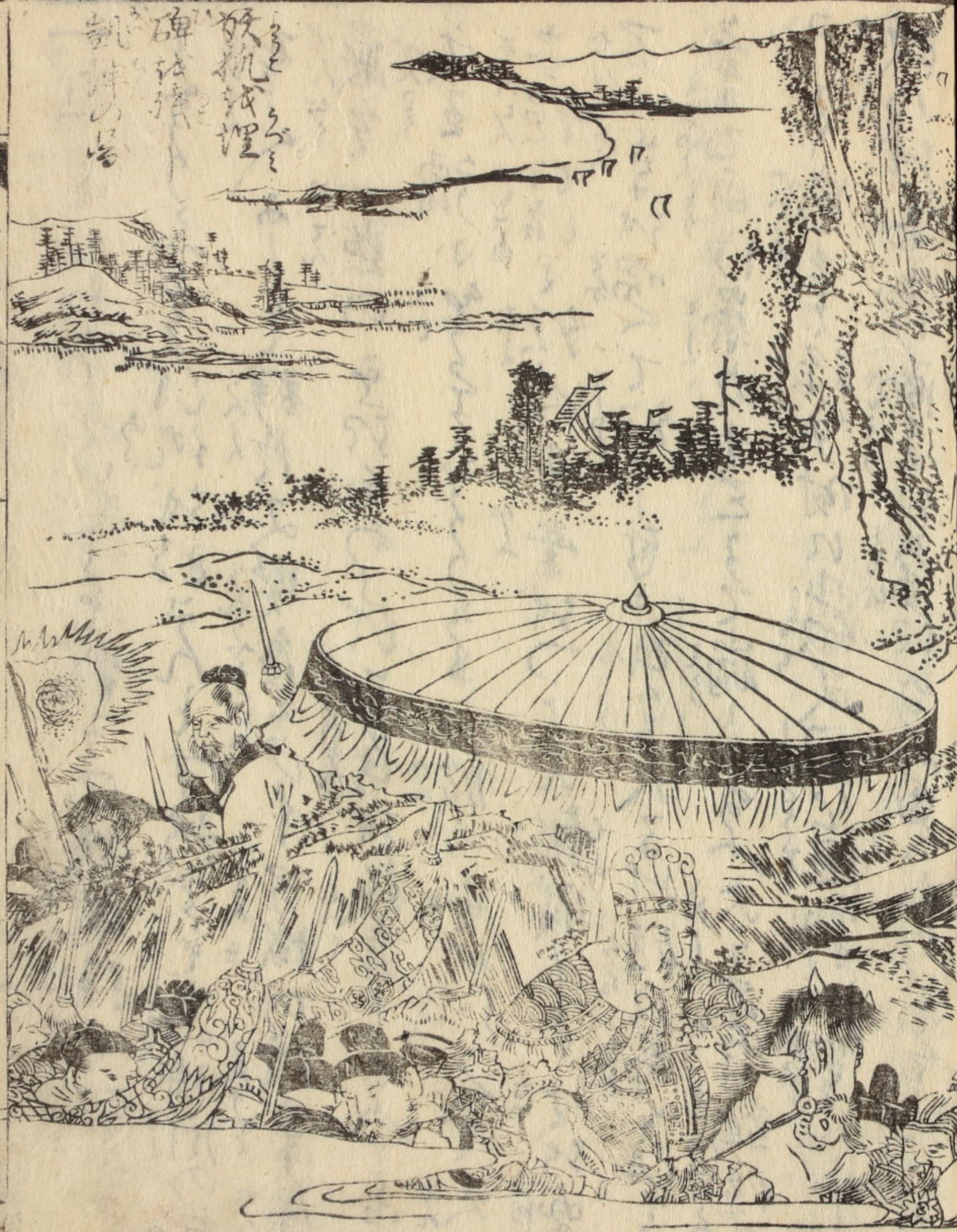
三國志卷之三

二十七

三書本合

昂俊より八十三万又よ八百八十年一未年之乱乃豊  
 手お城破しとこにてし凡八百位武百三十二  
 百六子み百十二年此御城破る御王殿城亡一帝  
 位に所せのひ王を周とお城の鎬に都を遷るよ相を  
 世有大に流産城封下の大公皇の軍功大ひるまは  
 齊の國城賜を度とたりしうまのあおそ大をそへ錦  
 繡城ぬの浦とひ細馬の車に乗て大塊の屋下はひ  
 づもまの入る叶時にあつて別を去し寒の馬氏  
 先非城悔し恨やう途中に出る車は前に相伏し  
 飛城あう一婦さび妻しちうのあもと御さるる大

公望車城内に論中城頂にるに相扇城推し彼地を  
 新し完尔と笑ていこく我今幸八十に及び出世の時  
 此もろ是我釣釣城曲す御城没すして齊の王を皇  
 皇方れ地城釣釣にちあんでゆが御むを皇に水は管ある  
 一と云るわる氏そあ城をの畏てあむるあてそ  
 水城地に遺後さをけあえれど皇にいらに我あさひ  
 えのま嫁れ嫁るひ相ま下と云換く徐くと車城推  
 させく齊の國か入ある是城王慶あ再び盆に返す  
 と云るえさねも文人を美しる色バとてつるあはし  
 婦しむべとてあはれとねんねも人をもあめ九虎の物



一國害せらるるといふも程その魂魄強て一國の  
 ともふきまび仇成りんとす然ども當時周の武王  
 聖人あしそ群臣又賢良をくく万機の改革事廉直  
 嚴を一懸のまに白あびも身許接育一のふて心又  
 文王無偏小智をさうらうらも巴殷の毒にうけて天下  
 安穩に治り人々を業成つて先敵腹しそけ成樂を  
 万く業成唱て祝しむる我を天子に位に歸りて七  
 年乙酉は歳九十三とて崩るる太子名曰頤位を  
 歸りて成王と稱す時に西叙又周公旦の親のあしそ  
 政乃成るもそけ成王に存するにあもあつるを  
 君もて能王取成深のふはかうらうと惡物成りての  
 ころこころふもそしうう天竺に後王の同姓助け麻累  
 とあしそ成巧もあし



三國大書傳卷之三終

